令和7年度 第4回社会教育委員会議議事録

【日時】令和８年（2026 年）3 月 24 日（木）15：00～17：00
【場所】生涯学習センター 市民ホール

【出席委員】

議　長	久保内　加菜	副 議 長	櫻井　聡
委　員	浦野　千鶴	委　員	小林　純子
委　員	常田　風花	委　員	林　　但
委　員	蛭田　道春	委　員	松山　雅彦
委　員	山岸　雅人	委　員	吉田　晴美

【欠席委員】

委　員	加藤　直保子	委　員	河井　眞二
委　員	臼井　護	委　員	志村　直愛
委　員	藤沼　直美		

【事務局出席者】

生涯学習課長	杉山　賢一	同課主査	森　雅敬
同課主任	遠藤　雅弘	同課主任	岡　本葉
中央図書館係長	深水　賢一		

１　開会

定刻通りに会議を開始した。

２　報告

（１）横須賀電子図書館の利用実績について図書館からの説明

〇中央図書館

1. 横須賀電子図書館の概要

- **サービス開始**：令和 6 年 8 月より、365 日 24 時間電子書籍の貸し出し・返却サービスを提供。
- **学校連携**：同年 10 月より市立小中学校の生徒・教員に電子図書館 ID を提供し、授業での利用を推進。
- **利用対象**：基本的に図書館カード所持者が利用可能。
- **貸出点数**：2 点（紙の蔵書数と比べてコンテンツ数が少ないため)。

2. 電子書籍コンテンツ

- **コンテンツ数**：約 1 万 3000 点。
- **読み放題パック**：
    - 一般の電子書籍と異なり、複数人が同時に閲覧可能。
    - 昨年度までは児童書がメインだったが、今年度より一般向け（例：るるぶ）も導入。

3. 利用実績

- **閲覧回数**：
    - 学校利用の割合は昨年度より増加。
    - 1 か月あたりの平均閲覧回数は減少傾向。
    - 集計期間のずれを考慮し、1 か月あたりの平均で算出（令和 6 年度：８月～3 月、令和 7 年度：4 月～2 月末)。
- **小中学校への調査結果**：
    - 平均貸出冊数は減少したが、0 冊（不読）の割合は減少。
- **電子書籍の利用状況アンケート**：
    - 「よく利用する」「時々利用する」を合わせた割合に大きな変化なし。

    - 「利用したことがない」小学生の割合が大きく減少しており、学校での活用が進んできている。
- **紙の本と電子書籍どちらを読みたいかアンケート**:
    - 紙の本を希望する割合が高い結果となった。
    - 図書館としては本に触れ合う機会を様々な形で提供していきたいと考えている。これからもニーズを調査したうえで、紙の本と電子書籍の比重を検討していく方針。

4. 令和７年度の取り組み状況

- **読み放題パックの拡充**: 同時閲覧可能なメリットを活かし、パック数を増加。
- **サイトの工夫**: 電子図書館トップページに特集項目を増やすなど、電子書籍への興味を引くための改善。
- **広報活動**: LINE による新着図書のお知らせを開始。
- **学校利用促進**:
    - 学校司書意見交換会でのヒアリング実施。
    - 学校で活用したい読み放題パックのアンケートを実施し、購入時の参考とした。

5. 課題

- **一般利用者の利用促進**:
    - ニーズに沿った電子書籍の購入。
    - 効果的な広報活動の強化。
- **学校連携における利用率向上**:
    - 昨年度より利用が低下しているため、学校との意見交換の場を設ける。
    - 学校で利用したい電子書籍の購入に関する調査。
    - 電子図書館の活用方法に関する情報提供。

〈質疑応答〉

副議長：アンケート結果における紙の本の人気は、インターネット上の平均値より低く、電子図書館の効果が出ていると感じる。

議長： 資料に記載されている電子図書館の利用実績の３番目である小中学生の調査結果の表において、令和６年度に比べ、中学生の平均冊数が半分以下になっている。しかし、説明において、平均冊数としては１～４冊という項目は増加しているので、実態としては変化が

ないという理解でよろしいか。

中央図書館： 今回の調査では、市立小中学校の全校の生徒を対象としており、その結果から、小学校は利用してもらえるようになったが、中学校は利用者が少ない状況であることが分かった。中学生のニーズに沿った本の導入など、強化を行っていきたい。

委員：年齢別のデータは取られているか。

中央図書館：電子図書館で年齢別の統計は取得可能である。小中学校の生徒を除く一般利用のデータでみると、利用者は 40 代以上が多く、20～30 代の利用が増加していないため、利用促進を図る必要がある。

委員：図書館は生涯学習の拠点であることも踏まえると、年齢区分別のデータがあればぜひデータを出してほしい。

中央図書館：承知した。次回電子図書館の報告時には用意する。

委員：電子図書館の書籍は具体的にはどのような方法で見ることができるのか。

中央図書館：PC、スマホどちらでも閲覧可能。読み放題パックは同時閲覧が可能。

委員：便利そうであるので、使ってみたいと思う。

中央図書館：例えば、紙の本のるるぶを旅行先に持参するとかさばるが、スマホで気楽に閲覧できるので、便利だと思っている。さらに周知して利用者を増やしたい。

委員：しっかり宣伝をしていただけると良いと思う。

副議長： 小学生と中学生が電子書籍と紙の書籍のどちらを読みたいかという項目で、両方読みたくないと答えた割合が令和 7 年度では、上がっている。これは本離れという解釈でよろしいのか。電子書籍が本嫌いを食い止められる方策はあるのか。数字から何を読み取られているか。
また、実際の紙の書籍と電子の書籍を合わせて見ていくと、40 代以上が増加しているとのことであったが。全体の中でどういう位置づけになっているのか。

中央図書館：本離れや忙しさもあるかもしれないが、図書館として様々なことを検討してい

く必要がある。

副議長：設問形式の変更があったか。

中央図書館：特に変わっていない。

副議長：今後の課題として対応をお願いしたい。

委員：1 月の下旬に公表された身体測定のまとめでは、5 時間以上スマホを見ている割合が増加していることが分かっている。スマホを見ている層に、本に読ませるように導いていけば、電子図書館の利用者は増えていくのではないか。
そして、2 ページ目に表記されている 0 冊の層の割合は PR を進めていけばいけるということであるか。
また、読書記録をとる際に、電子図書館にて本を読んだ場合も合算されるのか？

中央図書館：紙の本の貸出等を管理する図書館システムと電子図書館は現時点で連携していない

委員：別々に集計するのか？

中央図書館：自分が何冊読んだかについての集計は、電子図書館ではできないので、将来図書館システムと図書館を連携させたいと考えている。
また、連携すれば、電子図書館は、図書館に行かずに本を読めるが、図書館カードを作るために図書館に行かないといけないという矛盾点が改善され、オンラインで利用者登録ができるようになる。

委員：小中学生の 0 冊の層を減らしていかなければならないと思うが、どうされているか？

中央図書館：電子図書館の周知を強化し、授業で多く活用してもらうことが大切であると考えている。学校に出張して利用方法の説明をするなど工夫をしていきたい。

委員：スマホを長時間使う小中学生が増加している問題があるので、先生に授業中に本を読む時間を設けてもらう等すれば変化するのではないかと思った。

中央図書館：小中学生に配布されている端末のデスクトップに電子図書館のアイコンを設ける仕様を担当課にお願いしている。気軽に電子図書館にログインできるような仕組みを

整えていきたい。

議事：家庭教育支援についての提言書案

事務局から説明

第一章は家庭教育についての説明と、その重要性と現状　家庭教育支援の wellbeing の説明がされている。
第二章は、横須賀市の人口などに触れている。　家庭教育支援に関連するような内容の事業を行っている社会教育施設の例も記載している。第三章は、ご意見をもとに課題をまとめており、第四章は、課題に対する望ましい対応策について、第五章は、展望について説明がされている。
各章ごとの意見を求める。

〈質疑応答〉

委員：第四章の 2 項と 3 項のタイトルが似ているため、表現の変更を提案したい。

事務局：表記については今後検討する。

議長：第一章の「初め」について意見を求める。

委員：「情報モラル教育」という言葉は「メディアリテラシー」と同じと考えてよいか。

事務局：文部科学省のホームページからの表現であり、意味合いは情報リテラシーに近いと認識している。表現については皆様の意見を聞き、より良いものにしたい。

議長：1 ページ目の子どものメディア環境に関する項目に関し、質問がある。子どものメディア環境の変化が人間関係の希薄化、家庭教育の困難さにつながっているという認識で良いか。

事務局：その認識でこのテーマを載せている。

副議長：注釈と引用は区別すべき。URL だけでなく、具体的な資料名を明記すべき。QR コードの活用も検討するとよいのではないか。

事務局：注釈と引用の区別、引用文献の書き方については、より良い表記にしていく。

議長：社会教育委員会議で得られた横須賀の具体的な実践例も提言書に取り入れるべき。

事務局：現在庁内で横須賀市の取り組みを照会している。会議に関することも提言書に取り入れていきたい。

議長：第二章に移る。

委員：6 ページの生涯学習センターの「さきがけ講座」は現状が変わってきている。そのことは、明記すべき。

事務局：表記について確認していく。

議長：PTA の活動は提言書に取り入れなくてよいか。

副議長：親子工作教室など PTA が関わる活動があるため、PTA について記載があると良い。他の章では PTA に触れられていることを確認している。

事務局：工作教室など PTA に関する活動は、データとして提言書に取り入れたい。

委員：横須賀市の公園の面積が広い点は特徴として取り入れても良いと感じる。

事務局：横須賀には素晴らしい特徴が多く、内容を精査して適切な特徴を取り入れていきたい。

委員：横須賀市の特徴である外国文化も提言書で触れるべきである。

事務局：その点については、検討していく。

委員：社会教育施設だけでなく、学校の役割も取り上げられているか確認をすべきである

事務局：書き方については悩ましいが、工夫して表記をしていく。

議長：第三章に移る。課題だけでなく、社会教育委員会議で出てきた現状も取り込めるとなお良いのではないか。

事務局：委員からいただいた様々な取り組みを提言書に取り入れていきたい。

議長：社会教育委員会議での委員の方から様々な情報提供があり、既にまとめられているので、それらを活用したらよいと思う。第四章に移る。

副議長：「４つのＩ」と表記されている箇所は、「4つの In」という標記の方が良いのではないか。

事務局：4つのＩ は久保内先生からの表現であり、4つの in については検討したい。

委員：第四章の章立てが分かりづらい箇所がある。表現を工夫すべき。

事務局：表記については今後検討する。また、４つのＩの箇所については、in から始めると何かに包まれているようなイメージを持つため、well-being にもつながると感じた。委員の方からご意見いただければと思う。

副議長：地域学校行政内部のという意味は英語では internal の繋がりということであると思うし、そうした点をうまく言語化できたらよいと感じる。

委員：会議に参加していない子供や保護者に提言書を読んでもらうためのアプローチが必要。グラフィックレコーディングなど、イラストを活用する工夫を提案したい。

議長：イラストの活用など、提言書の工夫が必要であると感じる。

委員：第四章の学習機会とのつながりづくり推進の箇所に記載されている地域活動協力可能者リストの利便性を考慮し、まなびかんのサイトリンクや QR コードを付けるべき。

委員：QR コードは有効な手段であると感じる。

事務局：6,7 ページの施設紹介に QR コードを入れることを検討したい。

議長：「すかりぶ」の取り組みも提言書に加えて良いのではないか。

委員：提言書内にリンクなどを入れて、便利なシステムを知ってもらえるよう工夫すべき。

委員：学校色が薄められて提言書が書かれているのが良い。章ごとの繋がりを持たせると読

みやすくなると感じる。

委員：文字の羅列ではなく、具体的なものがないと一般の方には難しい。具体例の発信があれば関心を持ってもらえる。

事務局：具体例は盛り込みたい。委員の方からも情報提供があれば助かる。

議長：会議で触れられた委員からの情報も提言書に取り入れるべき。

事務局：そのようにしていきたいと思う。

議長：第5章に移る。
家庭教育を考えるキーワードを章の最初に記載すると分かりやすい。展望の箇所にある「日本国籍を～」といった記載は不要。横須賀の豊かな実践をつないでいくという前向きな表現にすべき。

委員：展望は文章のみのため、見出しを付けて見やすくすべき。

副議長：読んでもらえるような見栄えの工夫が必要。活動の情報を別添資料として写真なども含めて提供すると良い。
データ的な裏付けがないと思われないよう、関係者に読んでもらえる工夫が必要。

議長：分かりやすく、見やすく、手に取ってもらえる工夫をしていくべきである。

委員：写真提供の協力を申し出るべきである（生涯学習センターで撮影した写真など）。

副議長：潜在的に支援を必要とする人に届くような展望の表現をすべき。

議長：より良く届けられる構成が必要であると実感している。検討を進めていきたい。

委員：図式化・構造化し、実例と合わせて分かりやすい構成にすると提言書が見やすくなる。
自分のキャリアは自分でデザインするという視点や、こうした活動があるから安心できるといったポジティブなメッセージを盛り込むべき。

〇事務局より連絡

最後に、議長が閉会を宣言し、会議は終了した。

（閉会）